



清國留都ありし時  
予は此の如き廟の裡に  
起臥したりき

木下 杢太郎

奉天(現・中国遼寧省瀋陽)にて 明治38(1905)年

# 巻頭コラム 二冊揃った『日本からの手紙』——四十年近い歳月をかけた快挙

中島国彦（早稲田大学名誉教授）

『日本からの手紙』という名の一冊が刊行されたことは、今でも鮮明に覚えている。今から三十五年前、一九八三年（昭和五八）四月のことである。日本近代文学館が所蔵する、滞独時代の森鷗外に宛てた家族及び知友からの手紙一二一通が、詳細な「解題」とともに翻刻されたと聞き、早速手に入れた。駒場の文学館が資料の書籍化に力を入れている時期のもので、若いわたくしたちはその恩恵にあずかるばかりだった。本の装幀も地味で、書名も控えめだ。滞独時代森鷗外宛1886-1888という副題を合わせてみても、それだけではこの本の貴重な中身は、すぐさま充分理解出来なかつたように思う。

翻刻のまとめをされた稲垣達郎・竹盛天雄両先生から、資料の内容を聞く機会があり、この伝わった原本が大変な資料であることがわかった。滞独時代の鷗外が、両親や兄弟などからの手紙を、大判の立派なノートに貼付、大切に日本に持ち帰ったものなのである。全部で四冊あり、滞独前半（1884-1886）の二冊が長男於菟のもとに保管され、現在は文京区立森鷗外記念館の所蔵となっている。弟の潤三郎のもとに伝わった後半の二冊は、時代や書店・菟池佐一郎氏蒐集資料の一つとして、日本近代文学館が所蔵することとなった。菟池氏が資料を近代文学館に託す時、愛児と別れるときの気持ちだったという話を、稲垣先生からうかがった。そうした資料の運命にも、強い印象を持った。

鷗外の記した資料ではないので、折々の森鷗外展などでも出品される機会は少なかった。「宛書簡」の重要性の認識は、まだ無かった頃である。わたくし自身その実物をよく見せていただいたのは、最近のことである。

もう一つ、『日本からの手紙』を開いて驚いたのは、翻刻紹介に努力された両先生の、資料に対する姿勢である。『日本からの手紙』刊行に際し、日本近代文学館の館報の七二号（一九八三・三）に、稲垣達郎・小堀桂一郎・長谷川泉三氏の文章が載っている。稲垣先生の文章によると、出版まで翻刻の計画から一〇年、職員の宇治土公三津子氏の翻字をもとに、先生方や他の職員も集まって最終原稿を作ったという。それも会合五〇余回を超え、組み方なども充分検討されたことである。わたくしなども、両先生が、

よく文学館に集まっておられることを何度も耳にした。翻刻の姿勢は、「凡例」「解題」に明らかだが、原則正字使用、異体字もそのまま活かす、変体仮名も多くはそのままで活字化するなど、厳密の上でない。それも、噴刷印刷の協力による活字組みである。活字化であっても、少しでも原本の面影を残そうという努力が、そこにある。

そして、今年、長く待たれた滞独前半の二冊の翻刻が刊行される。書簡数も一五一通と多く、おのずとページ数も多くなった。作業にあたったのは、山崎一穎氏を始め、森鷗外記念会を支える常任理事の小泉浩一郎・須田喜代次・大塚美保・安川里香子・倉本幸弘らの諸氏であり、現在望み得る最高のスタッフである。時代の推移は、翻刻の姿勢にも影響する。変体仮名の扱いも変わり、漢字の字体の種類も限られたという。一節には書き下し文も添えられる。うれしい処置である。手紙を書き送った人々の詳細な紹介も貴重だ。

滞独時代の鷗外森林太郎が、日本の家族に出した手紙がほとんど保存されず、全集にも収録されていないことを考えると、父・静男・弟篤次郎（のちの三木竹二）・妹キミ（のちの小金井喜美子）らの手紙、いわゆる「家書」は、遠い異国の林太郎への期待や心配など、感情の共有がにじみ出ているもので、一〇〇年以上も前の人間の内心が表れている。ドイツへの便りは、届くのにはひと月以上かかる。息子が社会情勢や時流に取り残されないように、父は日本の現状を三五通もの手紙で報告する。三八通も残されている篤次郎からの便りは、文学や演劇な

ど、近代の芸術の転換期の激動を、兄に生々しく伝える。兄が予約しておいた「八犬伝」の活字本が、無事に完結したことも記される。キミの学校進学問題や結婚話も記され、異国の兄に詳細に知らされている。滞独後半に比べ、より見逃せない内容に満ちている、と言つてよい。

森鷗外記念館の二冊の手紙のまとめは、大学ノートの損傷が進み、於菟の意向で一九六三年（昭和三八）頃、帖仕立て二冊に貼付製本し直されたものという。体裁から見ると、外国の都市の建築で言えば、近代文学館の二冊は「旧建築」、鷗外記念館の二冊はさしずめ、「新建築」でもなるだろうか。しかし、両者に共通する、家族や知友の書いた毛筆の筆跡は、世紀を超えて生々しい。今それらを見つめることは、それを一〇〇年以上も前、ドイツの宿で一人心を踊らせたながらひもといた、若き日の森林太郎の心情に寄り添う体験そのものである。四〇年近い歳月をかけて奇跡のように出会った、この新しい二冊の翻刻を頼りに、その内容を知るとともに、いつか一堂に並べられた四冊の原本を見つめ、出来ればそれを手にとって、鷗外の心情を思う体験がしてみたい、と思わずにはいられない。

中島国彦  
なかしま・くにひこ  
1946年東京生れ。早稲田大学第一文学部国文学専修卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了、博士(文学)。早稲田実業学校教諭、早稲田大学文学部助手、専任講師、助教授を経て、1984年教授。現在は、公益財団法人日本近代文学館専務理事、全国文学館協議会幹事長。著書に『近代文学にみる感受性』(1994、筑摩書房)ほか。近著に『漱石の地図帳』(2018、大修館書店)がある。

## 展示報告

コレクション展

### 「東京・文学・ひとめぐり」鷗外と山手線一周の旅

会期：2018年7月7日(金)～9月30日(日)

春の特別展「鷗外と旅する日本」に引き続き、「旅」をテーマにした本展では、鷗外が人生のほとんどを過ごした「東京」について取り上げました。今年、東京府が設置されて150年目の節目にあたります。本展ではこれを契機とし、現在東京都心を環状運転する山手線を足掛かりに、各駅周辺の地域ゆかりの近代文学作品や文学者、鷗外の足跡等を三部構成で展示しました。

各地域にどのような特色があるのかを、駅看板をイメージした解説パネルで紹介し、その地域に対応するゆかりの資料を展示しました。神田では、鷗外『青年』に描かれた昌平橋周辺の喧騒や、神田生まれの小説家・山田美妙が鷗外に宛てた書簡などを紹介しました。渋谷、原宿では、青山霊園周辺を

描いた鷗外『バルナス・アンビュラン』自筆原稿や、渋谷周辺の雑木林の風景を描いた国木田独歩『武蔵野』を紹介。また、明治以降発展した鉄道網や市街電車について、尾崎紅葉『金色夜叉』や石川啄木『二握の砂』、鷗外『有楽門』などの作品を通じて紹介しました。

展示室の出口付近には、「山手線・文学・ひとめぐり路線図」と称したパネルを設置し、展示室内に展示した近代文学作品を、山手線各駅の開業年月日とともに一覧しました。本展の調査で見られた、当時15区だった東京市内に当る地域は作中によくその風景が登場し、市外に当る地域が描かれた作品は少ないという傾向が、一覧にも反映されたように思われます。

一方で、夏目漱石「三四郎」に「何処迄行ても東京が無くならない」とあるように、東京の市街地は拡大し続けます。明治・大正の東京の風景に注目して近代文学作品を読むと、文学者たちはこの急速に変化し続ける風景を、驚きや一種の哀愁を持って書き留めようとしていたようにも思えます。現代においても東京は常に変化し続けており、同じ風景のままである訳ではありません。文学作品に書き留められることで、私たちはその時々々の東京の風景に出会うことができるのです。平成が終わりました新たな時代を迎えようとする今、この展示が、明治・大正の東京やそこに生きた文学者たち、そしてその延長にあるこれからの東京にも思い馳せる機会となれたら幸いです。

会期中の8月26日、9月1日、8日の3日間限定で、文京区内大学の有志の学生たちによるギャラリートークを開催しました。展示中の一部資料について、学生それぞれが丹念に調査した成果を発表しました。大学生ならではの解説が大変好評でした。



手作りの解説パネルで丁寧に説明

会期中、左記の通り関連講演会を開催しました。

「鷗外が眺めた明治大正の東京」  
日時：9月23日(日・祝) 14時～15時30分  
講師：生田誠氏(絵葉書・地域史研究者)

## 地域情報

第20回

### 根津・千駄木下町まつり

10月20日(土)、21日(日)

根津・千駄木界隈で開催される下町まつりは、メイン会場である根津神社のほか、街中のサブ会場で模擬店、フリーマーケット、寄席などの楽しいイベントが予定されています。今年、20回目の記念の年です。20日は、記念企画として「映画の夕べ」が不ふれあいい館で開催され、文京区の貴重なフィルムが上映されます。また21日には消防庁音楽隊の演奏もあり、年齢を問わず多くの方にお楽しみいただけます。



画像提供：文京区

当館もサブ会場のひとつとして、スタンブラー用のスタンプ台が設置される他、文人銘菓や津和野名産品などを販売します。また当館前には、各会場を巡る無料シャトルバスの臨時停留所が設置されます。展覧会観覧後はシャトルバスに乗って、下町の秋を満喫しましょう。



展示のお知らせ

特別展

鷗外の『うた日記』

詩歌にうたった日々を編む

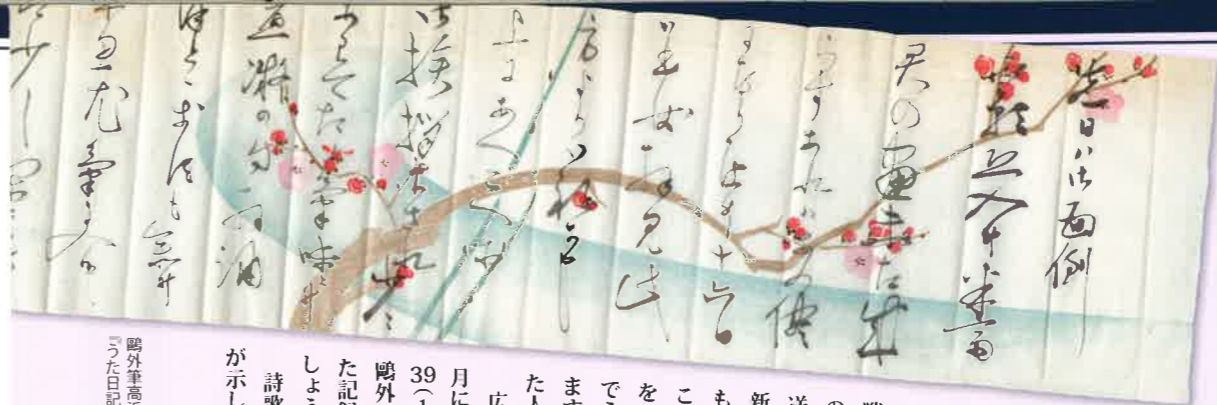
『うた日記』は、日露戦争中に鷗外が戦地で創作した詩歌を、戦後自ら編集し、明治40(1907)年9月に刊行した詩歌集です。一人の作家の一冊の詩歌集としては珍しく、万葉集の古歌から象徴詩まで、創作についてさまざまな試行がみられ、短歌331首、俳句168句、新体詩58篇、訳詩9篇、長歌9首が収録されています。

収録された詩歌は、戦地から家族や知友の人々への手紙に書き送られ、当時の雑誌や新聞に発表されたものもあります。本展では、こうした手紙や雑誌類を展覧し、鷗外が戦地でうたった詩歌を紹介し、また、『うた日記』刊行までの過程や編集に関わった人物、鷗外の詩歌観についても概観します。



『うた日記』明治40(1907)年9月 春陽堂

鷗外筆高森虎子宛書簡 明治39(1906)年2月22日(部分)  
『うた日記』に収録する俳句について、鷗外は虎子に教示を得ていた。  
〔公益財団法人虚子記念文学館蔵〕



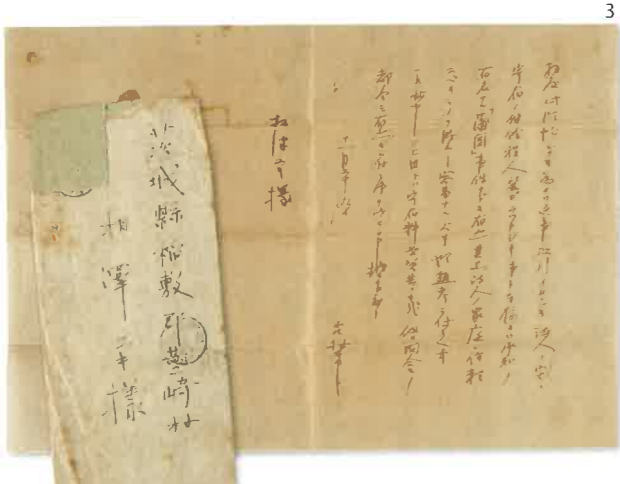
展示会場から

近年収蔵した資料の中から、鷗外の詩歌集『うた日記』(明治40年)や、詩人との交流に関する鷗外自筆書簡を紹介します。

- 1は、日露戦争の戦地から俳人・岡野知十(万延元-昭和7年)に宛てた書簡です。書かれた俳句は『うた日記』未収録ですが、鷗外が様々な俳句を作っていたことが分かります。
- 2は、鷗外が日露戦争の戦地から帰国後の明治39年1月20日、観潮楼にて行われた鷗外の誕生日及び帰国祝いの席上で書かれた寄せ書きです。鷗外自筆の俳句は『うた日記』に収録されています。
- 3は、詩人・澤ゆき(明治26-昭和47年。本名：相澤ゆき)に宛てた書簡です。澤は茨城県稲敷郡に生まれ、明治44年現在の共立女子学園を卒業しました。詩人になる志を持ち、鷗外に住み込みで勉強できる詩人の家の紹介を依頼しましたが、果たせませんでした。

これらの資料は特別展「鷗外の『うた日記』」会期中に展示されます。

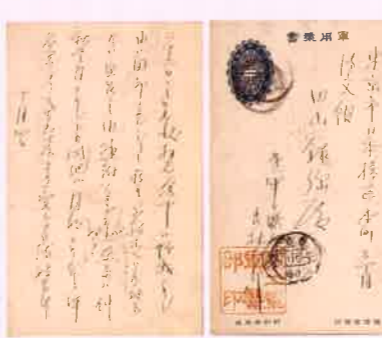
参考文献『詩人 澤ゆきの世界』小野孝尚著 筑波書林 平成3年ほか



鷗外が戦地でうたった詩歌が掲載された雑誌等。

鷗外筆森於菟宛書簡  
明治38(1905)年1月11日消印  
妹・喜美子の短歌とそれに対する返歌が記されている。  
〔田山花袋記念文学館蔵〕

鷗外筆田山花袋宛書簡  
明治37(1904)年10月14日消印  
博文館の従軍記者だった田山花袋は、戦地で鷗外と交流した。  
〔田山花袋記念文学館蔵〕



会期 ● 2018年 10月6日(土) - 2019年 1月14日(月・祝)  
〔会期中の休館日〕  
11月27日(火)、12月25日(火)、29日(土) - 2019年1月3日(木)  
会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2  
開館時間 ● 10時~18時(最終入館は17時30分)  
観覧料 ● 一般500円(20名以上の団体・400円)  
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料  
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット押印入、友の会会員証ご提示で2割引き  
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

1. 鷗外筆 岡野知十宛  
明治37年推定10月30日付 [501189]  
2018年度受け入れ

住所面 / 東京市麹町区有楽町三丁目一番地  
岡野知十殿  
出征第二軍々医部 森林太郎  
朝寒や前掻く馬の蹄の音 十月三十日  
\*絵葉書には、「紀元2564」とデザインされている(皇紀2564年のこと、1904(明治37)年にあたる)。

2. 鷗外ほか寄書 森潤三郎宛  
明治39年1月21日消印 [501185]  
2015年度受け入れ

住所面 / 本郷区駒込千駄木二番地  
森潤三郎様  
さかえ  
ささげよむ牡丹のまへの勅語哉  
署名右上から信綱(佐佐木信綱)、ひさやす(平野万里)、かをる(小山内慈)、山君(森於菟)、敏郎(伊原青々園)、さかえ(大久保栄)、白甲(吉田白甲)、八千代(小山内八千代)、米斎(久保田米斎)、たけじ(三木竹二)、上田敏、きみ子(小金井喜美子)

3. 鷗外筆 相澤ユキ宛  
『明治44年』11月29日付 [401208]  
2017年度受け入れ

封筒表 / 茨城県稲敷郡黄崎村 相澤ユキ様  
封筒裏 / 東京陸軍省 森林太郎  
拝啓此頃忙シク候為メ御返事延引イタシ候詩人ノ宅ニ寄宿ノ件余程人選方ムツカシキ事ト存候御承知ノ有キナル。蒲団事件ナドモ有之其土詩人ノ家庭ニ信頼スベキモノヲ得ルコト容易ナラズ候猶熟考可仕候へ共  
御書状中ノ七四ハ寄宿料学資兵二候哉他二問合セノ都合モ有之候ニ付序ヲ以テ御申越被下度候  
十一月二十九日 森林太郎

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連イベントを予定しております。事前申込制、定員50名です。申込方法は7頁をご覧ください。

講演会「加害者は誰? 戦地の詩「罌粟、人糞」をめぐる謎」  
講師 大塚美保氏  
(聖心女子大学教授・森鷗外記念会常任理事)  
日時 11月24日(土) 14時~15時30分  
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室  
定員 50名(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)  
申込締切 11月9日(金) 必着

対談「鷗外が『うた日記』に託した想いとは」  
講師 山崎一穎氏  
(跡見学園女子大学名誉教授)  
今野寿美氏(歌人)  
日時 12月22日(土) 14時~15時30分  
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室  
定員 50名(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)  
申込締切 12月7日(金) 必着

ギャラリートーク  
展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。  
10月17日、11月14日、12月12日  
いずれも水曜14時~(30分程度)  
申込不要(展示観覧券が必要です)

★中学生向けギャラリートーク  
鷗外が戦地から長男・於菟や家族に宛てた手紙を中心に、特別展を紹介いたします。当日参加の中学生には、詩歌鉛筆をプレゼント!(お一人様1本)  
11月3日(土・祝) 14時~(30分程度)  
申込不要(高校生以上の方は、展示観覧券が必要です)

モリキネカフェ  
カフェ便り

7月9日、10日、森鷗外記念館よりほど近い光源寺で開催されたほおずき市にあわせ、20時までの延長開館を行いました。モリキネカフェも19時半まで営業を延長。また、2日間限定で数種のドイツインと美味しいおつまみが楽しめる特別メニューを提供しました。



今年の夏は、各所で例年以上の暑さを記録。モリキネカフェでは昨年に引き続き、クーリウムソーダを提供しました。さらに今年は、コーヒートジンジャーエールのフロートや、文人銘菓でおなじみいちようサブレのアイスクリーム添えが、新たにメニューに加わりました。また、カクテル・モヒート連想させる「気まぐれソオダ」は、ミントの爽やかさと写真映えるカラフルな見た目が好評でした。

モリキネカフェでは今後も、季節に合わせた特別メニューが登場予定です。折々の表情を見せる庭園を眺めながら、目と舌で季節を味わってください。

# 森鷗外と斎藤茂吉

## 後藤明日香（斎藤茂吉記念館学芸員）

森鷗外と斎藤茂吉は、明治四十二年、観潮楼歌会で初めて会い、以後交遊した。

大正四年のある日、茂吉は古泉千樫とともに、日本画家で歌人の平福百穂の「朝露」と題する六曲屏風一双の批評を鷗外に依頼しに行った。鷗外宛の茂吉・千樫・石原純・島木赤彦による寄書き葉書の日付から、それは十月十七日であったと推測される。その時、鷗外の膝の上では小さな男の子が遊んでいた。男の子はおそらく森類氏であったと思われる。後年、類氏によれば、茂吉は「私と鷗外先生が話をしてゐる前を坊ちやんはよく行ったり来たりなさいました。鷗外先生はそれをちつともお咎めにならないで、ちら／＼する坊ちやんの間から、顔を出してお話になりました<sup>(1)</sup>」と話し、類氏の結婚披露の時もその話をしたという。また鷗外はその頃、「浪江抽斎に手をつけ始めており、それについてよく話した。その様子も如何にも楽しんで、茂吉は考証学の面白味といふやうなことも何かあるのではないか<sup>(2)</sup>」と思ひ、その後、鷗外宛の葉書（大正五年一月二十五日）で「浪江抽斎、紙上にて拝読いたし居り候、中味よりも御研究の経過のすぢが小生らに感ふかく候」と書き送っている。この「紙上」というのは「東京日日新聞紙上」を指しているのだろう。「浪江抽斎」は大正五年一月十三日から五月十三日まで連載されており、葉書を書いた頃はちやうど始まって少し経ったところであった。浪江抽斎の研究を楽しそうに語る鷗外に接していた茂吉は、その「御研究の経過のすぢ」を新聞連載によってたどることで「考証学の面白味」を感じ取っていたのかもしれない。

七面鳥酒也。朝露飯也。酒以酔人。固可。飯以飽人。亦無不可。况香積之飯。非常所有乎。

木村林太郎

訪問からしばらくして、茂吉のもとに鷗外より次のような「朝露」の評が送られた。  
七面鳥酒也。朝露飯也。酒以酔人。固可。飯以飽人。亦無不可。況香積之飯。非常所有乎。

この「七面鳥」というのは、百穂の代表作のひとつである絵画「七面鳥」のことだろう。それと「朝露」とを比較して評しているのである。この評は、歌誌「アララギ」大正四年十一月号に掲載された。また、評の原本は茂吉旧蔵品として遺族から寄贈を受け、現在は斎藤茂吉記念館で所蔵している。  
大正十年九月、茂吉は百穂とともに上野の博物館へ鷗外を訪ねた。茂吉は翌月に欧州留学を控えており、暇乞いの挨拶をするためである。すると鷗外に「齋藤君は西洋に行かれるさうだが、僕などには実にはうらやましいね」と言われ、留学の不安を感じていた茂吉はその言葉が「いかにも力強く響いた」という。「私は急に暗々とした面持になつて、向うに行つてからの覚悟なんかをいろいろ先生に問うたりした。いま思へば、どうも少しはしいやいで居たらう<sup>(3)</sup>」と想起している。

翌年の大正十一年、茂吉は留学先のウイーンを離れベルリンに滞在していた折、鷗外の訃報を知る。そして、森於菟氏がベルリンに留学中であることに気付き、下宿先を訪ねたのだが、於菟氏は避暑で留守にしていたことが叶わなかった。帰国後、茂吉は岡子坂の鷗外の自宅を幾度か訪れている。類氏によると「父が亡くなつてから何回位お出でになつたか、ふと自動車で立寄られる時は何時もかうして胸像を御覧になつた<sup>(4)</sup>」という。また、岩波書店版の鷗外全集の編纂に携わり、「伊沢蘭軒」を収録した「鷗外全集著作篇第七巻」（昭和十一年七月二十五日発行）ほかを担当した。昭和十年十二月四日の茂吉の日記には「四時前二岩波書店二行キ、鷗外創作全集刊行ノ相談会ニゾム」とあり、その時の茂吉の短歌四首が、詞書に「鷗外先生を憶ふ（十二月四日、全集出版相談会）」として歌集「曉紅」に次のように収められている。

うつせみの吾も老ゆれば日をつぎて森鷗外先生をしきりに思ふ  
三毒のうへに立ちたるけぢめとぞひとたびのらしし君をこそおもへ

## これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。  
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

|   |   |
|---|---|
| 10月20日(土)、21日(日) 10:30～15:00                                      | 鷗外マルクト「おいしい秋の津和野」◎                                  |
| 協カ：津和野町東京事務所 会場：当館前、エントランス  | 鷗外の故郷・島根県津和野から“おいしいもの”をご用意します。                      |
| 10月29日(月)、11月12日(月) 13:30～15:30                                   | 新・観潮楼歌会「短歌を楽しむ」(全2回)                                |
| 講師：さいとうなおこ氏(歌人、「未来」選者) 会場：講座室                                     | 料金：2500円(2回分、資料費含) 定員：30名 申込締切：10月17日(水)必着          |
| 「短歌とは何か」というお話から実作まで、一緒に短歌を楽しみませんか。 ※ご応募は、2回ともご参加いただける方に限ります。      |   |
| 11月1日(木) 10:00～17:30  | 開館記念日行事◎  |
| 開館記念日に展覧会を観覧いただいた方に、オリジナルポストカードをプレゼント!                            |   |
| 11月17日(土) 14:00～16:00   | 津和野・小倉・文京 交流イベント                                    |
| 「わが街、鷗外～津和野、小倉、千駄木の文学の旅」  |   |
| 講師：今川英子氏(北九州市立文学館館長)、小泉浩一郎氏(森鷗外記念会会長)、山崎一類氏(森鷗外記念館(津和野)館長) [五十音順] | 会場：講座室 料金：500円 定員：50名 申込締切：11月5日(月)必着               |
| 鷗外ゆかりの地にある文学館同士の交流・リレートークを行います。                                   |   |
| 12月8日(土)、9日(日) 10:30～15:00  | 鷗外マルクト「ドイツクリスマスマーケット」◎                              |
| 会場：当館前、エントランス   | クリスマスグッズ、ドイツワインやシュトレンなど、ドイツのクリスマスマーケットで定番の品々が登場します。 |
| 12月9日(日) 11:00 / 13:30  | 「クリスマスコンサート」◎                                       |
| 演奏：MOGカルテット 会場：エントランス 料金：無料                                       |   |

### ◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@morigai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールで行います。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]

故先生がハバナくゆらしみたまひしみますがた偲ぶこよひ染しも  
軍医総監の軍服にて胡坐をかきみ給ひしおもかげわれのまなかひにあり

一首目「うつせみの……」を作歌する茂吉の様子について、一緒にいた於菟氏によれば、「どうも字が余ると前屈みで度々指を折つて数へられる。その齋藤さんの姿が無邪気ともどほけてゐると思はれる様子でをかしかつた<sup>(5)</sup>」という。  
茂吉が最晩年を過ごした新宿区大塚町の自宅寝室には床の間があり、そこには生涯敬愛した鷗外の書が好んで掛けられた。とくに「惟有樵風引磬音 右録廣大鴻句 鷗外湛」と書かれた書は、床の間に掛けられている写真も残されている。この鷗外の書は、今年リニューアルした斎藤茂吉記念館の常設展示室で展示している。この他にも新たに約四十点を加えた約百点の作品・資料とともに茂吉の多面的な魅力に触れることができるようになった。ぜひご覧ください。

- 〔注〕
- (1) (4) 森類「防空壕」『斎藤茂吉全集』月報第二期六、岩波書店、一九五四年
- (2) (3) 斎藤茂吉「森鷗外先生」『斎藤茂吉全集』第五巻、岩波書店、一九七三年
- (5) 森於菟「齋藤茂吉さんのこと」『斎藤茂吉全集』月報第二期十八、岩波書店、一九五五年



斎藤茂吉記念館  
山形県上山市北町字弁天1421  
TEL: 023-672-7227  
開館時間 ● 9:00～17:00(最終入館 16:45)  
休館日 ● 毎週水曜日(祝日の場合は翌日)  
年末年始、7月第2週の7日間  
入館料 ● 大人600円、学生300円、小人100円

## 活動報告

### 鷗外忌記念講演会「鷗外LOVE!」開催



鷗外忌記念として、今年7月16日に詩人・伊藤比呂美氏による講演「鷗外LOVE!」を開催しました。著書「切腹考」でも、鷗外への愛を綴った伊藤氏。当館オリジナルの「鷗外Tシャツ」を身に付けて、詩人(実作者)ならではの視点で鷗外の作品創作における特色をお話いただきました。

もとは説経節等を愛読していたという伊藤氏は、やがて鷗外の翻訳作品に出会い、『聖ジュリアン』の文体に強く惹かれたと言います。伊藤氏は同作のほか、『冬の王』や『白』などの翻訳作品を取り上げ、鷗外の使用する「のである」という文末に注目。この言葉が、作品全体の中で効果的なリズムを生んでいると続けます。伊藤氏は鷗外の文体が地層のように見えると述べ、漢学、江戸の読み物や語り、ドイツ語を始めとした語学、さらには生まれ故郷である津和野の方言など、鷗外の背景にあるさまざまな「言葉」が、文体に影響しているのではないかと考察されました。  
ユーモアいっぱいの伊藤氏の語り口に会場も笑いにつつまれ、鷗外への愛がふれる鷗外忌となりました。

### 「加賀美幸子の朗読を一緒に開催

8月25日、NHKの番組ナレーションや古典講読でおなじみの加賀美幸子氏による朗読会を開催しました。前半では、加賀美氏に鷗外『高瀬舟』を朗読していただきました。後半では、当館の年間展示テーマである「旅」にあわせて、松尾芭蕉の『おくのほそ道』を参加者全員で朗読。合間に加賀美氏の『おくのほそ道』解説や、当館学芸員による「鷗外の旅」の解説も交えながら、時代を越えた旅や句歌を楽しみました。



# 2018年度後期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

10月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  |
| 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | 31 |    |    |    |

11月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    |    |    |    | ☆  | 2  | 3  |
| 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |    |

12月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    |    |    |    |    |    | 1  |
| 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  |
| 9  | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 30 | 31 |    |    |    |    |    |

1月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  |    |
| 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |    |    |

2月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    |    |    |    |    | 1  | 2  |
| 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  |
| 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
| 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |    |    |

3月

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|    |    |    |    |    | 1  | 2  |
| 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  |
| 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
| 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 31 |    |    |    |    |    |    |

特別展「鷗外の『うた日記』～詩歌にうたった日々を編む」  
10月6日(土)～2019年1月14日(月・祝)

コレクション展「鷗外と小倉」(仮称)  
2019年1月19日(土)～3月31日(日)

- 休館日
- ★ 開館記念日
- 鷗外誕生日

## 編集後記

昨年度開催の特別展「明治文壇観測」  
鷗外と慶応3年生生まれの文人たち」図録が  
「東大比較文学会 Carlo 2017 文学展賞」  
を受賞しました。Carloとは、展覧会  
カタログを品評し楽しむことを目的とし、  
当該学会有志により運営される会です。  
毎年一年間に出版された展覧会カタログ  
を、内容・装丁・学術価値などのさまざ  
まな視点から品評、表彰されています。



特別展「明  
治文壇観測」  
図録の受賞理  
由には、「雑  
誌『めさまし  
草』における  
鷗外と文人た  
ちの交流とい  
う、これまで  
の鷗外研究では関与されていなかった着眼点  
や、「明治文壇観測の年表」や『めさまし  
草』収録 批評作品一覧などの研究成果  
を挙げていただきました。誌上をもって  
厚く御礼申し上げます。

当館発行の図録は、図書室や展示室内  
休憩室でお読みいただけます。また展覧  
会終了後も、売り切れの場合を除き、1  
階ショップで継続販売しています。これ  
を機に、過去の図録も是非お手に取って  
みてください。

前号5頁掲載の「展示会場から」におきまして  
誤りがありました。正しくは左記の通りです。  
訂正してお詫び申し上げます。  
27頁目(誤)長野県  
(正)群馬県

## 交通案内



### ●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- ・JR山手線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分

### ●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
  - ・都バス 上58番系統「回子坂下」下車 徒歩5分
  - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511  
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、  
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等

文京区立  
**森鷗外記念館**  
Mori Ogai Memorial Museum